

あろう。その後で、新らしい勉強と色々弾く事と楽しむ事との適度な区切りの後で次の段へ進む。こうして、どこまででも行けるところまで、或は行きたいところまで登つて行くのである。

低い段階について考えてみよう。「神々の黄昏」の終りの部分の悠大な奔流、或は「ベートーヴェンの第九交響曲」の最終の讃歌は、大きさの点を別にすれば「ショパンの作品二十八第七、ハ長調の前奏曲」よりも多くの美を持つていと言えるだろうか。古今を通じ最大のテクニクを持つていたピアニストの一人であるモリッツ・ローゼンタールは、この短い単純な名曲を六十年弾いていて、今なお、より深い美を発見しつつあると私に告げた事がある。ローゼンタールがこの「イ長調前奏曲」を弾くのを聴いた人は、決してそれを忘れる事がないであろうと私は言い切る事が出来る。この完璧な作品は、ピアノの初歩を済ませたアマチュアならば弾きこなし得る筈の技術的範囲に属している。それは、冷い印刷の譜の上に永久にながらえて生命を与えられる事待ち、現在及び未来を通じ数知れぬ多くの専門家並びに素人のピアニスト達によつて一生学ばれる事を待つていたのである。

私は此処でエドウィン・ヒューズの編集になるシャーパー版「Master Series for the Young」について少し述べたいと思う。このシリーズについては幾らほめてもはめ足りない。ピアノ音楽の最上なものへの門としてこれ以上のものは無い。このシリーズは、バッハ、ヘンデル、ハイドゥン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ウェーバー、メンデルスゾーン、シューマン、ショパン、グリーグ、チャイコフスキーの十二大家の作品を一人一卷ずつに収めたものである。何故このシリーズが抜群に優秀であり且つ最も値打があるかという事は、ヒューズ氏の書いた序言の一部によく示されている。この各巻は、一人々々の作曲家の作品中技術的に一番易しいものを集め、技術の程度に従つて漸進的に順序をつけたものである。ここに含まれたすべての曲は、この作曲家達に依つて特にこの楽器の為に書かれたものばかりで、この中には、これ迄同種類の曲集をスポイルしたような歌劇、交響曲、弦楽四重奏曲等から取つた没趣味な編曲は入つていない。各巻は、その巻に取められた作曲家の略伝をもせている。この「Master Series for the Young」は程度の進んでない成人のアマチュアに依つても、少年の学習者が得ると同じ利益に浴する事が出来る。ただ音楽の趣味だけの面から見ても、このシリーズは大成功である。詳しくしらべるとこれ等の曲が中くらいな難かしさにまで進む様になつてゐるのに気が付くであろう。例をあげれば、それ等は、モーツァルトのニ長調ロンド、ハイドンのト長調奏鳴曲、バッハのト短調のガヴァット及びミニゼット、シューベルトの変イ長調即興曲等である。

私はなお「The Hundred Best Short Classics」というシリーズを推奨する。これはカスパー・ホワイトモアが主となり、ハロルド・サミュエル、トビアス・マセイ其他を委員として編集したものである。このクラシックの百曲中には、三頁より長いのは一つもなく、各々の曲の前には簡潔な巧妙な激動的な解説がついている。発行社はロンドンのペーターソン出版社であるが、勿論シャーマーを通じて手に入れる事が出来る。これは七巻から成つている。

“The Master Series for the Young”と“The Hundred Best Short Classics”とは大作曲家達の作品に分け入る最もよい材料を与える。ローゼンタール同様、驚異的な技術の持主であるウイルヘルム・バックハウス(註一〇)はこう言つた事がある。「難かしくなくて美しい作品が沢山あるのに、何故難かしいものを求めるのだろうか。野原一杯に美しい花が咲いているのに、何故樫の木から花束を作ろうとするのだろうか。」これが、一つの点を除いては、私がこの本の中に表わした見方なのである。私が除いた一つの点というのは、アマチュアというものは時が経ち能力が進むにつれて、ただ美しい花を摘むというのでは満足しないからである。私達アマチュアは繁みや草叢や苗床を根こぎにし、時としては、樫の木とまでは行かなくても相当大きな木にまでかかつて行きたい。バックハウスが樫の木と呼んだのは、勿論、ベートーヴェンのハンマークラ

ヴィーア奏鳴曲やリストのドン・ファン幻想曲やバラキレフのイストラメーやブラームスのパガニーニ変奏曲等の様な旋風の作品のことである。すなわち、ホフマン、ホロヴィッツ、ブライロフスキー、シモン・バレル、エゴン・ペトリ及びバックハウス自身の様な、樫の木から葉々と花束をこしらえて、それを優美に持運ぶ事が出来る芸術家達の技術をさへも極度に駆使する作品のことである。賢明なアマチュアは樫の木に向つて戦を挑む様な事はしない。勿論それを根こぎにしようなどとは思わない。アマチュアはそういう曲を、悔いる所なくピアノの巨匠達に委せてしまふ。彼は、自分が安楽に腰かけて聴いている時、そういう大曲を演奏するのみならずよく解釈してくれる芸術家達があるという事実に対して、感謝している。賢明なアマチュアは、根気よく努力する事によつて自分のものとする事の出来るような宝を選び出す事であり忙しいのである。中くらいな、或は中の上程度の技巧で弾ける名曲は、例えばシューマンの「アラベスク」、パルムグレンの「五月の夜」、ショパンの夜想曲作品七二第一、ドビュッシーの「月光」と「亜麻色の髪の乙女」、リストの「コンソレーション」第三番などの様な曲である。右にあげた曲名を注意しておいて頂きたい。たとえ、今の所ではその或るものにはとても歯が立たない様に思われても。私も貴方と同様、一個のアマチュアである。長い年月を私は一日一時間しか練習しなかつた。

五年前に私は、ショパンのロ短調スケルツォの譜を見て恐れをなしたものである。そのとき、私は、この曲を絶望的に且つ永久的に手が届かぬものと思つた。私は練習を続けた。今では私はそれを弾いている。

ピアノ曲の大階段にしつかりと足を踏みしめた人は、必ず上へ上へと登ろうと努めるに相違ない。既に登つている人は、もつと高く登ろうとするに相違ない。それは、その人がもう習う事をやめてしまつた後であるにしてもやれる事なのである。この本に書かれた單純な提言に忠実に従えば出来る事である。ウラジミル・デ・パツハマン(論註十二)は言つた。「よい教師は、彼の門下生が彼から教えられた程度に止まつている事を期待しない。最もよい教師は、門下生が自分自身の力で深く探り新しい美を学ぶ様にと勵まして行く人である。自らを助けるという事を、私は誰よりも多く信奉する者である。」

三 最終の目標

ここで暫らく、ロ短調スケルツォのとても征服出来ないように思われた段階から、征服し得た段階に至るまでの変化について、もう一度考えてもらいたい。私にとつてそれは非常な興味を惹いた実例で、ここに、この書の目的と(こう言つてよいものならば)、使命がある。たゆみなく毎日練習するという事が、この傑作を私の手に入らせてくれたのである。私がピアノに対して、生れついでに才能を殆んど持つていず、私の記憶力は非常に弱くて、私が借りるなり考えるなりして得たあらゆる記憶方法を動員しなければならぬのであつたという事は問題外におく。ここに言うのは練習をするという事——趣味で練習をする喜びと、趣味で練習する事がもたらす満足とについてである。マルク・ハンブルク(論註十二)は「自分の力がだんだん伸びて行くという事、前にはとても出来なかつた事が楽に出来るようになるという事を知るのは、誠に愉快な気持である」と書いている。スケルツォに対しての私の極めて喜ばしい経験は、他の作品——ショパンの嬰へ

長調夜想曲と「子守唄」、ドビュッシーの「水の反映」、それからファリアの「火祭りの踊り」などの場合にも繰り返された。こういう繰り返しは、私の指がこわばつてキイを押す事が出来なくなるまで続けたいと思う。然しこれは、私が檜の木に向つて戦いを挑んでいる事を意味するのではない。

ピアノ曲の階段を上り始めるよい方法は、前から弾きたいと思つても難かし過ぎると感じていた様な作品を選ぶ事である。それから私がこの本の第二部に詳しく述べている方法に従つて練習するのがよい。それに要する時間が非常に少いのには貴方は驚くであろう。そうしたらまた別な曲を選ぶのがよい。その次には二つの曲を同時にやつてもよい。その上に、もう一曲加えたら、曲の数は五つになる。それ等を全部生かしておく——そのうち二つに力を集中している間に他の三つが消えてしまう事がないようにするのがよい。どうしたらそれがやれるのかはこれからお話しする。恐らく、その最初のグループの中には、自分が前によく弾いたけれど忘れて終つた曲の中の二曲なり三曲なりを入れたいと思うであろう。一度でもピアノを習つた人の記憶の中には、何という沢山の「忘れられた」曲の幽霊がひそんでいる事か。

そういう幽霊の中から、二つか三つを復活させて最初のグループに入れればよい。そのお蔭でそのグループは手に入れ易くなるであろう。こういう曲の「忘れられた」度合というものは、実際にはごく部分的なものである事がわかつて来る。一度憶えた曲は、たとえそれが二十年前のものであつても、同程度に難かしい新曲を学んで記憶に残すよりは易しいものである。ピアノ教師の中で最大の一人であるトビアス・マセイは彼の著書「語譜について」(On Memorizing)の中に「一度与えられた印象というものは、心の帳面の中から完全に消せるものではない」と書いてゐる。

一つの目標——たとえば五つの曲を語譜するという事——を定めて、それを征服したら、前よりも一段高い段の上に立つて、次の目標——十曲——を見通す事が出来る。こういう風にして五曲を手に入れたら又五曲という風に進む。これを繰り返しているうちに、二十五曲から成るグループを手に入れたという事を自分で驚く様な事になるだろう。私も一九三八年にその驚きを経験したのだ。もう一度言うけれど、私の記憶力は情ないほど水準以下なのだ。それだからこそ、この本の第二部には、語譜を助ける為の資料を沢山収めた。私は何時も語譜に骨を折つた。他の人ならば、私の半分の骨折もせずに語譜が出来るかも知れない。然し、この本の語譜法の頁はどうぞ利用して頂きたい。それは記憶のいい人にも悪い人にも役に立つと思う。

また曲目の計画に立返ろう。二十五曲のグループはその二倍にする事が出来るだろう。それは無理だという人もあろうけれど、私は出来ると主張する。たゆみなく良心的に練習を続けさへすれば必ず出来る。尤も、演奏出来る曲目が五十曲に達した時には、一日一時間の練習では足りなくて毎日二時間稽古をしなくてはならないかも知れない。けれども、趣味を楽しみ乍らやる事だから、練習の時間を殖やすのは望むところだろう。悪くすると荒馬を二匹つれて来なければ——或は、ひどく気嫌を損じた妻君なり亭主なりが力づくでするのでなければ——ピアノから離れられなくなるかも知れない。

「一寸待ちなさい」と貴方は言うだろう。「貴方は私を、あのポロ雑誌で七つの室を一杯にしてゐる変人に仕立てようとしている。」いいえ、どうして、そんなわけではない。

然し、決して極端な事を求めるのではないという事を明らかにする為に、今の所の目標を二十五曲とする事に賛成しておこう。御希望に依つては十五曲でもいい。十曲でもいい。五曲でもいい。憶えようとする曲の数は御自由であるが、数よりもずっと重要な事は、譜譜する事に依つてピアノの弾き方が進歩するというその点である。実際に譜譜した五曲なり十曲なりのグループは、何時でも弾けなければならないという程に考えなくてもいい。——ただ勉強の為にそれをすると言

うなら別であるけれど。

こういう曲のグループを、数週間、時としては数箇月もその儘放つておくのもよい考えである。後からその曲をも一度取り上げてみた時——その数週間又は数箇月の間に他の曲を勉強していたとして——それ等の曲をわけなく思い出す事が出来るのに驚くだろう。アントン・ルービンシテインが弟子達に向つて、よく憶えた曲について「しつかりした大地の上を楽に歩く」と形容した様な所まで楽に立ち帰れるのだ。

では、ピアノの演奏を全般的に改善するという事をここで問題にしておき乍ら、何故演奏曲を作り上げる事にこれ程重点をおくのだろうか。恐らく、演奏曲を殖やして行く事はやり過ぎない方がよいと思うかも知れない。その通りである。然し、演奏曲のレバトリーを作り上げる事は大いに力を入れなければならぬ。それは、譜譜をして弾くという事が他のどんな方法よりも演奏の水準を高めるからである。その事はテクニクの上の能力や、タッチや、落着きと自信や、楽譜の頁の上または鍵盤の上で繰返される楽句の型や、和音の配列への親しみなどが之に依つて進められるからである。こういう事から、読譜力や、伴奏をする力や、合奏する力や、色々な曲にぶつかつて行く力——つまりピアノを上手に弾く力——を作る事に役立つのである。その仕事に

ついでには、我々ピアノノ趣味家は、この事が他のどんな仕事よりも多くの努力——退屈な練習、役に立つ練習——をしなければならぬという喜ばしい事柄に今ここで会うのもよいだろう。私は目標について少し長く語り過ぎた。ではこれから目標に至る方法に目を転じよう。

第二部 「辿る道」

一、必要なもの

その為には次のものが必要である。

ピアノ一台 よく調律されたもの。若しもそのピアノが最近に調律されていなかったら、どうぞ調律させて頂きたい。この事は、ピアノ演奏を再び築きあげる為の賢いプレリユードであり、その為に費す数ドルの金額よりも遙かに大きな値打を持つ。私は経験から知っているが、なおざりにされた、弦の緩んだピッチに、我々は馴れてしまい易い。馴れてしまった後でピアノを調律させた時は、その響きや倍音が丸い豊かさを持つのにびつくりする事だろう。我々は唸るようなラジオや、回転のムラな蓄音器を我慢する事は決してないけれど、ピアノが調律してなくても余り気にかけない傾きがある。調律は規則正しい週期に行われなければならない。私は一年三回の調律をお奨めする。

鍵盤一つ、清潔である事 指と鍵盤とは親しい関係にある。習い始めから清潔な指で清潔な鍵

盤に触れるというのは望ましい習慣である。この事は、どうでもいい事のように思われ易いけれど、ヨーゼフ・ホフマンはそうは思わない。彼は「ピアノに触れる前に、甚だ平凡な小さな事を御注意したい。貴方が手をお洗いになつた様に、よく鍵盤を拭つて下さい。」と言う。

二つの手 どうぞ爪を短く切つて、弾く時に爪の音を立てないように。

一時間 これも多分前に書いた事と思う。この一時間をどういう風に分けて使うかは次の章で述べる事にする。忙しい中を、どうしたらその一時間が生み出せるかと尋ねる人があつたら、物事を片附ける事の大先生、アーノルド・ベネット(譯註)の言葉を私は引用しよう。「邪魔物を片附けて、その場所を作るのだ。」三十分早く起きて、朝三十分やるがよい。あと三十分は、仕事が生んでから夕食までの間にやるがよい。尤も、それを休みの時間にしたければ、夕食の後でやるがよい。さもなければ、その一時間を朝または晩やるのもよい。若しも、どうしても都合がつかないならば、その一時間を細かに分けて、やれる時に出来る文の事をするのがよい。アーノルド・ベネットは小説・戯曲・エッセイ等を年平均三十七万五千字ずつ書き、数カ国語を習い、毎日六哩ずつ歩き、驚くべき多量の書籍・雑誌・新聞を読み、遂には百万字をも越した彼の日記を毎日つける。美学・自転車・ヨット・玉突き・水彩画・スケッチ・および原稿に飾字を加

える事などを楽しみ乍ら——その上にアーノルド・ベネットは、一生涯を通じてピアノを練習し巧みに演奏した。どうして彼はその時間を見出したのだろうか、彼は邪魔物を片附けてその場所を作つたのだ。

出来る限り毎日練習しようとする意志 これが私のやり方の真髄なのである。私が予言する所の驚くべき結果は一日一時間の練習を仕遂げる事から生れて来る。それは毎日の時間数のたつた二十四分の一である。しかし、一年に積もると三百六十五時間になる。そうして之は直ぐに習慣になるのだ。絶えず進歩して行くようなやり方を計画して、それを実行したら成人でも練習を楽しむようになる。

今日の世の中では、昔にくらべて建設的な趣味を人は遙かに多く持たねばならない。そうして音楽ほど心を豊かにする趣味はない。私の独善的な見方から言うと、ピアノを弾くにまさる音楽趣味はないのである。

練習に当つて心を集中しようとする意志 心を集中する度合に比例して、より多くの結果をより短い時間に生み出す事が出来る。又そうすれば退屈感を感じずに時間は走つて行く、心を集中する能力は、使えば使う程進歩するのである。

楽譜 ピアノ音楽を復活させる楽しい一面は、かつて弾いた事のある譜を楽譜棚の中から取り出す事であろう。それ等の眠っていた音符はそのとき生きた音に変わるであろう。演奏曲目が進歩し拡大するにつれて買うべき作品については、最寄りの楽器店に助言を求められる。(譯註二四)

ポケット楽語辞典一冊 シャーマー出版社発行の優秀なものが二十五仙で買える。

メトロノーム一個 ただし之は無くても済む。ヨーゼフ・ホフマンはメトロノームを使う事に賛成しない。これに就いての質問に彼はこう答えた事がある。「時間の長短に拘わらず、メトロノームを使って弾く事はしないがよい。それは音楽の脈膊をビッコにするし、演奏の生きた表情を殺すからであり、テンポはタッチと強弱とに密接に関係していて極く個人的なものだからである。一つの曲の速さを、音楽上から言つて正しく定める為には、自分の気持にたよるのがよい。」

右に述べたシャーマーの「ポケット楽語辞典」は楽譜の上で見当るような各国の速度標語の意味や強弱の記号の意味を解明して呉れる。早さを定める以外のメトロノームの役目に拍数を明らかにするという点があるが、それは自分で(声に出して、又は沈黙で)数えても同じである。

習慣の組合せ 既に持つている幾つかのよい習慣をその儘利用し、他の幾つかの習慣をこの目的に合うように変え、更に幾つかを加える。

二、練習は楽しい必要事

習慣は不思議なものである。私にとつて、それはラジウムやズルフォン・アミド剤よりも奇蹟的である。此処から私達は「習慣」と共に進んで行く事にする。ピアノを弾くという事は精神的な習慣と肉体的な習慣との合成物だからである。従つて、此の線に副つて正しい習慣をつけるという事は我々にとつて必要である。その習慣がいつたら、それが無意識の中に働くところまで完全に自分のものにならなければならない。悪い習慣を捨てて良い習慣を作ろうとし又は新しい習慣をつけようとした場合、始め暫らくは努力しないとそれが働かない。この時期にはたとえ精神的苦痛を感じようとも、強い意志の力を働かせなければならない。けれどもその習慣は、驚くほど短い間に努力を忘れさせてしまふだろう。それはそれ自身の情性をつけ始める。そうして遂に、その習慣通りにしないと精神的苦痛をさえ感じるようになる。

のみならず、習慣がそれ自身の力で働く長さは、始めの意識した努力に依つて働いた時間より

は遙に長いものである。ハムレットは、悪い習慣を捨ててよい習慣をつける事に就いて彼の母と話し合っていた時に、「習慣は殆んど天然の刻印を変えてしまう事が出来る。」といった。ピアノ演奏に関する限り、私はこの大詩人の説を訂正したい。私はこの中の「殆んど」という字は要らないと思うのである。

我々が始めた仕事であるピアノ演奏の進歩向上において、悪い習慣を捨てて良い習慣をつけ、更に新しい習慣を生み出す事ほど面白く嬉しい事はない。今後は我が生涯の日毎に、我々は「習慣」が奇蹟的であるという事の証拠を見るであろう。

我々がつけるべき最初の習慣は、毎日定まつて練習するという事である。

第二の習慣は、この仕事を易しい方法でやらずに、骨の折れる方法でやる事である。この事は曲の中の部分をマスターし、それから全曲をマスターする場合に適用される。我々は、後に至つて僅かな努力で無上の楽しさを味い乍ら大きい収獲を得る事が出来るようになる為に、今は小さい収獲を得る為にも多くの努力を費し乍ら匍うようにして進んで行かなければならない。

毎日の一時間は三つの部分に分けるのがよい。——楽曲、テクニク、及び初見練習。演奏を総ての点で進めて行こうとするアマチュアにとつては、一番大きい部分が楽曲である。

どう分けるかと言う事は、練習する人個人の問題である。私自身は一時間を色々な風に分けてみたが、今の所は次の様にしている。

楽 曲 四十分

テクニク 十分

初見練習 十分

この仕事の初め数箇月は、恐らく従前の最高の点或はそれ以上の点に早く行きつこうとしてテクニクの稽古に熱中するのがよいと考えるかも知れない。その考え方は誠に結構である。テクニクは有れば有る程よい。それに就いては「テクニク」の章で色々な助言を見出すであろう。そう考える人は時間を次の様に分けてもよい。

楽 曲 三十分

テクニク 二十分

初見練習 十分

勿論これには他の組合せも出来る。自分で色々試みて自分の必要なり傾向なりに一番適したのを選ぶのがよいだろう。そうして一番自分に適した型を見出したならば、それが最も能率的であ